

「ネットワークな」人への追惜の辞

麗澤大学経済学部教授

高辻 秀興

牧野先生は、平成10年4月に本学部国際経済学科専任教員として就任された。その後国際産業情報学科の新設とともに同学科に籍を移し、爾来情報科学の基礎科目およびコンピュータ・ネットワークの専門科目を担当された。氏の功績はなによりも教育と研究、情報システムセンター運営、およびKIU運営における実践的で多面的な活躍にある。

氏はいわゆる「ネットワークな」人達の1人である。コンピュータ・ネットワークの技術の普及を支えた数多くの研究者の1人である。かつて学究の姿勢を、理学・工学・技学と区分した人がいた。理学は真理を追究し、工学は真理より役立つことを追究し、技学は役立つものを作ってみせることを追究する。氏の活動のスタイルは技学であったと思う。その成果は、多機能ゲートウェイの開発や条件不利地域での無線によるアクセスシステムの開発などの研究論文につながっている。今日のように研究論文の作法が制度化された世界では技学の側面は誤解を生みやすくなかなか受け容れられないことが多い。氏としてももどかしさはあったと思うが、それでも立派に形をなした点は評価さるべき点である。翻れば20世紀初頭に原子模型を提案した物理学者の論文は今日の作法からすれば相当にムチャクチャであったという。それは新しい知の世界をデザインしてみせることの難しさであったと思う。氏の活動もそうした営みに類するものであったと思う。

いま一つ無念なのは、情報教育の教授法の分野で氏がまだ成したかもしれない領域が残されていることである。氏は情報リテラシーの初学者の学習過程を何年かにわたって調査していた。一部は学会でも報告されているが、それらは今日でいうインストラクショナル・デザインに属することである。氏の研究の出発点は心理学にある。インストラクショナル・デザインはまさにその知見が活きる領域である。情報処理教育研究集会には何度か氏とともに参加し有効な教授法について議論したことがあった。そしていま氏が残した膨大な教材を見るにつけ、それをどのように発展させるべきなのかつい議論の延長として無言の問いかけをしそうになる。

いまだに何かの間違いで氏が異次元に隠れてしまったような感を禁じ得ないのが正直なところである。この空白感はまだしばらく続くだろう。しかしひとまず別れを告げねばならない。さようなら牧野先生。